

★戦争認識と戦争教育の難しさ★ <世界史最終講>

(正しい戦争教育とは何か？世界史を学んだ君たちへ ～後世に伝えて欲しいこと～)

主観的ではなく、感情的ではなく、客観的に、建設的に考えてみて下さい・・・

① “太平洋戦争肯定論と否定論の是非は？”

- ※ なぜ、アジアの人々は日本人に憎しみを覚えるのでしょうか？
なぜ、ドイツ人はヨーロッパの多くの人々に憎まれていないのでしょうか？
- ※ 中国をはじめとする国家的戦略としての反日教育だけがその原因なのでしょうか？
人々にとって肯定することのできる「戦争」って存在するのでしょうか？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・この問いに君自身ならどう考えますか？

② “戦争の加害者と被害者とは一体誰なの？”

戦争とは・・・国家×国家 であり 個人×個人 であってはいけない。
外交手段 であり 感情の暴発 であってはいけない。

よって、加害者は、すべての()であり、
被害者は、すべての()のです。

17世紀の()戦争から、「戦争」は形を変えました・・・
()出身の平和思想家< >がこう言いました・・・
『戦争にはルールがあり、兵士と兵士との戦いでなければいけないと・・・』

18世紀末の()出身の平和思想家・哲学者< >もこう言いました・・・
『ルールを遵守させるための国際平和機関の存在が必要だと・・・』

しかし、近代以降多くの平和思想家の努力も虚しく、
そのルールは侵されてきました。

勝つためには手段を選ばないという理念のもと、
()戦という過ちまで犯し続け、今に至っているのです。

- ※ 南京大虐殺で殺された中国人の数は 30 万人だったのでしょうか？
2つの原爆投下は人類にとって正しかったのでしょうか？
これらのことを論戦することは、何を生み出すことなのでしょうか？
- ※ 自分の国を愛するということは、国のために死ぬることなのでしょうか？
オリンピックやワールドカップで日本を応援するのでは、国を愛するに値しないのか？
- ※ 戦争反対！人権擁護！と叫びデモをすることで、政治家は戦争をやめ、世界から戦争は消えるのでしょうか？
いつの時代も、多くの政治家は当選すると保身に走り、選挙になると良いことしか言わない。
しかし、選んでいるのは国民自身であることを忘れてはなりません。
- ※ 恨みや憎しみは、世代を越え、民族・宗教対立という名を借りた戦争が生まれる事実……
世界の多くの宗教・民族は互いを理解し合い、共存することは出来ないのでしょうか？
シンガポールに争いはない。それはなぜかということに対する簡単な答えとは何でしょうか？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・この問いに君自身ならどう答えますか？

～1年間、世界史という「グローバルな観点」から多くの戦争や戦いを学んだ君だからこそ、
入試だけのモノではなく、世界の中で生きていくことを本気で考えてみて下さい。～

長い歴史の中で、多くの人々は殺し合い、多くの人々が悲痛な叫び声をあげ、多くの人々が平和を願った。しかし、常に悲劇は繰り返され、その思いは歴史の跡地となりました。僕は、そんな多くの跡地を、この足で歩き、この目で見、この体で感じ続けています。そして、争う彼らに必要なものは、

少しの臆病 と 少しの勇氣 と 多くの理性 と 多くの慈悲 そう感じています。

③入試に出るその後の日本史

1945年～：GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）＜マッカーサー元帥＞の支配

1946～48年：極東国際軍事裁判（東京裁判）・・・A級戦犯、巣鴨プリズン、パール判事

1951年：サンフランシスコ講和会議・・・日本の独立承認＜吉田茂＞

日米安全保障条約 * 警察予備隊の結成

1956年：日ソ共同宣言・・・ソ連による承認 → 国連加盟

1965年：日韓基本条約

1968年：小笠原返還

1972年：沖縄返還＜佐藤栄作＞、日中共同宣言＜田中角栄＞